

## 青山、志賀家墓所の空想と夢想（四）

——大正六年七月三十一日の墓参——（二）

町 田 榮

1

江口渙は、大正六（一九一七）年度の『創作壇に活動せる人々』（大六・一二『新潮』）を回顧的に見渡した、その総括で次のようにいう。ことは志賀直哉の『和解』（大六・一〇『黒潮』）評価についてである。

（略）そして私は「和解」の前に涙ぐんで思はず襟を正さざるを得なかつた。「和解」はたしかに近頃類を見ない位「まこと」に充ちた芸術である。真実を生きる人に依つてのみ生む事の出来る尊いほんとうの芸術である。芥川君が「和解」を評して「超文学の文学」と云つたのは、全く至言であると思ふ。実際私は近頃この位心の根柢から揺り動かされた作品を見た事はない。「和解」はたしかに大正六年に於ける文壇最高の傑作である。

と、ことばを極めて絶賛する。やや興奮気味、それを抑えられぬ口調だ。かねて、江口の『まこと』の芸術』の説は、『和解』発表直後の時評『出来秋』（できあき）志賀直哉氏と谷崎精二氏作品』（大六・一〇・一一『時事新報』八面）でとなえている。

注目されるのは芥川龍之介の『和解』評言、「超文学の文学」を採録していることである。いつ、どのような場面で吐いたことばかわからない。かりに、採録者の文脈に即して解せば、「心の根柢から揺り動かされた」のゆえんを「超文学の文学」といったものであるらしい。が、容易ならぬ語義はそれを超えていよう。納まらぬ。志賀文学屈指の同情者、精通者、傾倒者になつて行く作家の、この「至言」は看過できない。片言隻語、それも謎語と、葬ることはできない。先き立つ前章が残っているからだ。私信三本ではある。いずれも、横須賀市汐入五八〇番地尾鷲梅吉方に仮寓して、海軍機関学校へ英語の教授囑託と

して通勤しているころである。

「和解」をおもしろくよんだよ 朝飯をくひながらあれをよんでみて学校を遅刻した おやちがよく書けてゐると思つた (大六・一〇・四付松岡譲宛書簡)

「和解」を読んで以来どうも小説を書くのが嫌になつた (大六・一〇・二付池崎忠孝宛書簡)

後者に明かす心酔ぶりは穏やかでない。とはいつても、芥川は必ずしも「和解」一辺倒でもない。同年十月三十日付松岡宛に、後藤末雄の強硬な反対意見を聞き、それを伝えていることで知れよう。「後藤は『和解』は悪作で『異端者の悲しみ』の方が遙かにいいと云つてゐた」と。バランスは回復している。

芸術観から見ても、作風、方法から見ても、『和解』と芥川文学とは対蹠的である。客観的にいえば、およそ『和解』は容れられぬ。芥川には、とうてい読むにたえぬはずであつた。違和、相異を凌いで迫つて来る、おそらく不可解な、不可思議な魅力があつた。驚きもあつた。が、「超文学の文学」の語は、芥川個人の枠をも超越しよう。普遍性がこもろう。一般化した評言である。いったんは自身の創作態度が試めされ、後藤の説にも触れて、充分に吟味したうえの立言であつた。初発の感想「おもしろくよんだよ」の余裕とはいひ難い、含意した揶揄、不審、疑義などの念も払拭されてしまふ。「和解」は読後に次第に評価を高め、とりわけ谷崎潤一郎「異端者の悲しみ」に「母の靈にさ、ぐ」(大六・七「中央公論」)との対比を通過して、嘆賞

の度を強める。領略を免れるには、遠く位置して自己を保持するよりない。「超文学の文学」は、芥川の自我識別、「和解」別格視、例外化の弁である。みずから傾倒を禁じる。

もともと、芥川は「和解」を前にして「涙」せず、「襟を正」すこともなかつた読者である。僅少な読者のひとりであつたらしい。深刻にならず、いたづらな感傷にもふけらない。ごく手ぶらで、「朝飯をくひながら」接近して、しかも精読を余儀なくする。海軍機関学校文官の「遅刻」は、始末書ものであろう。「おやちがよく書けてゐる」という特記が、その優れた眼識の所産である。卓見であろう。主人公の方はいうまでもない。「おやち」の方がクローズアップして映り、こちらを評価する。従つて、父と子とが歩調を揃えて、不和から和解へとたどり来る筋道が明視しえたのだ。

作品構成は放恣で、描写、叙述も不均等な、小説作法など無視した粗笨、蕪雑な「和解」である。幾多の瑕瑾をかかえ、それを隠さない。しかし、堅固無類の構造体をなしている。芥川の慧眼の働くところ、おのずから端倪すべからざる制作になつて行くようだ。「超文学の文学」と吐かした理由は何か。「和解」のどこにそれを見出したのか。ひと時、へ絶望的羨望感」に瀕したことは明白だ。志賀のことはばを借りると、『和解』は「何の作為もせず、事実を只その儘に書いて行つて、それで芸術品になつてゐる所がい、のである」(「唇が寒い」)がある。盲目的な自信家の妄言、自負と見まがう。もしかすると、芥川の評

したところに通じるのではないか。「超文学の文学」、この結語は掘り起される必要がある。

周知の通り、「和解」は公表されるや、熱誠のこもった支持、歓迎を受ける。ほとんど、圧倒的なといってよい。評家、読者たちは多く「涙」したらしい。近松秋江の『文芸時事』(下)(大六・二〇・二五「読売新聞」七面)などは口汚い僻目として埋没してしまう。各紙誌の時評はこぞって讃辞を掲げる。父子和解の場面に、不和から和解への結実、「涙」の共鳴を呼んだものである。後年、正宗白鳥はこの場面に皮肉、犀利な毒矢を放って「通俗小説の泣かせ場」、「涙攻め」と断じ、「悪作」(『志賀直哉と葛西善蔵』昭三・一〇「中央公論」)と酷評した。小林秀雄も着目して、「作者の強力な自然性が人々の涙腺をうつつからだ」、また「最上芸術は例外なく自然の叫びを捕へてゐる」(『志賀直哉(世の若く新しい人々へ)』昭四・一二「思想」)と、解明に向けて示唆的だ。なるほど、なぜか父子和解は了承、理會され、胸裡に浸透する。おのずからなる説得力が発揮されたからに違いない。高い浸透圧を持っていたからに相違ない。なぜか、は解き明かされねばなるまい。

時評には、次のような冷静な作品評も出ていた。当初から、父子「不和の原因」の欠如が指摘されているのである。大正六年十一月号『文章世界』誌上、A・B・C・D四者による匿名合評「十月の創作 志賀直哉氏の『和解』(黒潮)」のA、Dの発言である。抄出する。

A。(略)この作の主眼となつてゐる和解を強調するためには、不和になつた動機をもつと瞭然させて置かなくてはならない。読者は想像することは出来るが、一個の作としては何うしてもこの不備を看過することは出来ない。

D。(略)この作では、不和の原因を明かにしてゐないことは矢張一つの欠陥だ。和解が果して何ういふ氣持まで進んでゐるのか疑はしいところがある。それで和解後も主人公はもうこれで永久に大丈夫だらうか、何うだらうかと云つてしきりに氣にしてゐる。読者にも幾らか危な氣な感じを与へるけれど、何しろ日常の生活を有の儘に書いてゐて、これだけの立派な作品を出すことは容易なことではない。

(略)

ふたりの時評家は、作品の欠陥に父子「不和の原因」が語られていないことを挙げる。それを、主題たる父子和解との相関において論じる。前者を具備しない限り、父子和解は完全には描き切れてはいないという。作品「和解」は、ふたつが十全に果されていないと批判する。しかし、作品享受の大勢は後者一方に偏した。感激的に父子和解の絶対的安定性、永遠性が信じられる。「不和の原因」のみ切り離されて、極言すれば、その有無が論議されることになつて行く。おそらくA、Dにとつては片肺飛行の論調であろう。實際、志賀の自作自解の説も、強引な自作弁護の説も、それに載っている。

例の過激な「唇が寒い(福士幸次郎君)」(大一一・三「新潮」)

中から右の二発言に対応する、当然ながら部分的に、と思われ  
ることを抜き書きしてみると、

あの作に対する其頃の月評が「兎に角和解を書きながら、  
不和の原因を殆ど書いてない事が欠点だ」かういつた。

(略)然し自分はあの作の中で、不和の原因を書かうとすれ  
ばきりが無い、といふ事を再三、書いてゐる。左う繰り返  
へし、云つてゐる作者が、何故それを書かなかつたか、或  
は書けなかつたか。そして左う云ふ氣持を批評家は何故察  
しないのかと自分は思つた。自分から云はすれば「和解を  
書きながら、不和の原因を書かぬ欠点」を挙げる代りに、  
「不和の原因を少しも書かず、和解の効果をあげる事が出来  
た」事を何故認めないのかと云ひたい。

怯むところはなかつた。一步も譲らぬ。逆に、反問を投げか  
えます。もとより、このようなことばは理路をなさぬ。一方的な  
強弁ではある。「批評家は何故察しないのか」とは、不当な要  
求に違いない。批評家の「無理解」に対するいらだちが作用し  
ていよう。志賀の主張は、「不和の原因」の欠如はともかく容  
認するとしても、それは必要としないという。「和解を書」き  
切つて、「和解の効果をあげる事が出来た」からという確信に満  
ちている。

では、しばらく観点を移して「不和の原因」は置く。自他成  
功したと認められる、父子和解の方に立つて考へてみる。私見  
を述べれば、父子ともにそれぞれの「和解の原因」も描かれて

いないと思う。「不和の原因」が欠けているのと同様である。

父子和解は父と子双方の心情がなごみ、合致しなければ成り  
立たぬ。時評家の作中に求めた「不和の原因」と同質、同レベ  
ルでは「和解の原因」も語られていない。永年にわたつて不和  
の關係になじんだ、この父子はなぜに和解するのか。それは、  
不和との選択によつたものなのか。その契機は何か。いつか。

父と子とを和解に向けて推進させるものは何か。和解はなぜに  
大正六年八月三十日でなければ訪れないのか、などなど。作中  
にふたりの和解、調和の心情醸成、経過、結実への「和解の原  
因」を求めても、回答はえられるまい。和解の成る当日まで三  
年来、父と子とは没交渉だからである。この間、たがいに和解、  
調和の胸裡を照らし合わせる機会すらふたりにない。

それぞれの年令的熟成、父直温六十五歳、志賀三十五歳とか、  
とくに主人公側の人生経験、わが子の生死なほに際會によるそれとか、  
調和の心情の傾斜とか、「愚かさから来る悲劇」の回避とか、  
老弱な祖母の八十二歳への配慮とか、父子間、異母兄弟の間  
で心労を尽した義母浩の恩恵とか、折りから渡米留学する異母  
弟直三、十九歳への目配りとか、いずれも作品枠内の現場では、  
「和解」を決定づける「原因」とはならぬ。伝記的研究の入り  
こむ余地がない。父子和解は「不和の原因」の除去でも、謝罪  
でも、反省でも、互譲でも、補償でも、妥協でも、仲介説得で  
も、その所産ではなかつた。いつさい斥けられている。至純き  
わまりない和解、調和の心情一致を描き出す。

和解の直後に、父は「女中」に命じて「お奥さん」を招じ入れ、妻に告げる。

「今、順吉の話で、順吉もこれまでの事は誠に悪るかつたと思ふから、将来も又親子として永く交はつて行きたいと云ふ……。左うだな」と途中で父は自分の方を見た。／＼「え、」と自分は首肯いた。

しかし、父子面談の实情を要約したわけではない。子は謝罪などしていい。詫びを入れていい。父は心得て、あえていつたのだ。むしろ、義理の間柄に立つて、腐心惨憺した妻に宛てた、専用のねぎらいのことばである。子も父の真意を悟る。翌日の我孫子行で、父は、主人公の妻に対して同じことばを繰り返ささない。「順吉も今後は又親子として永くつきあつて行きたいと云ふ希望だと云ふし、それは私にとつて誠に望ましい事なのだから、(略)」が和解の実態に合う。

一見、義母をして和解の功労者のように遇して描くが、すぐに解除して平常に戻す。義母は謝辞を述べ、祖母への報告を命じられる。誰れを奨揚するでも、犠牲にするでもない。恩恵にもあずからぬ。父と子それぞれの内心から湧き出た和解、その結実を描く。至純なゆえんである。(和解の原因)は現実の形而下には求められない。広く、深い感動を普遍的に喚起できた理由である。

おおよそ、(和解)の語義、用法は七つほどあるうか。贅言すれば、心なごみ、穏やかにうちとける情態を指すのが本義で

あろう。争いをやめて仲直りすること。国際、政治上の用語として、司法、裁判の調停措置として、また、民法六百九十五条の紛争解決の条文中、

和解は当事者か互いに譲歩を為して其間に存する争を止むることを約するに因つて其効力を生ず

とある。キリスト教の教義としても、心身医療の用語にも使われている。(和解)とよむときは別義になる。

作中、父子不和は次のように記述されている。「親子といふ事から来る逃れられない色々なよれ混つた複雑な感情を含むでたにしろ、其基調は尚不和から来る憎しみである」と自分は思つてみた」(「和解」二)という。露骨に書いたものである。父と同様であろう。ふたりが父と子であるがゆえの「憎しみ」である。典型的に悪質な近親憎悪だ。これが一挙に理想的な和解に達してしまう。有りえぬ事実を物語つたのである。

「和解」という作品について卑見は述べた。これは、次のような作業が裏づけている。——かねがね、この作品を読むとき、他の同題、類題の作品の中に連れ出してみたいと思つていた。比較検討というほど、積極的な意味合いはない。わたくしの耳目を洗つておきたいと思つたからである。「和解」に対する見方、読み方が大きく変つたとも思われない。少しく視野を拡げて(不和)、(和解)文学の認識をえたい。その後で、何か言つてみたい。たとえば、(特異な作品)とか、作品の(独自性)とかいうのに他の同題、類題作品に類例の乏しいことを確めて

から、この常套語を使いたい。自戒ではある。管見に入った「和解」作品はあまりに少ない。以下に列記してみる。些事、徒事にすぎない。なお、「不和」と題する作品については調べてない。

徳田秋聲『和解』昭八・六・一『新潮』第三〇年第六号通

卷第三四五号 ちなみに、里見弴『二人の作家』昭二五・

四・一『文芸』がある。

川端康成『姉の和解』昭九・二二月号『婦人倶楽部』第一

五卷第一二号

木暮亮『和解』全三卷『木暮亮作品集』Ⅲ昭四六・一・一

五刊 木暮亮作品集刊行会に収録 同集卷末「あとが

き」に昭一六・九『作家精神』に発表とあるも未確認

保根川辰兵衛『和解』昭和一八・五・一『文芸首都』第一

一卷第五号の「新人文芸」のページ

丹羽文雄『和解』昭三五・九・一『婦人画報』六七四号

太田治子『和解』昭六一・八・二〇『婦人公論』臨時増刊

オール女流作家37人集

河野修一郎『和解』平三・四・一『海燕』第一〇巻第四号

三好京三『和解旅行』平五・二・一冬季号『三田文学』第

七二巻第三二号

若竹七海『東京一夜』故事之和解』平六・六・一『小説王』

第二巻第六号

神津カンナ『七年目の水解』平七・四・二八『週刊小説』  
第二四巻第九号

石原吉郎『和解Kに』昭五〇・一・一『現代詩手帖』第一

八巻第一号に総題『詩四篇』中の『和解Kに』として発

表のち詩集『北條』昭五〇・四・一刊 花神社に収録

大養道子『和解への人—教皇ヨハネ二十三世小伝—』平二・

一一・五刊 岩波書店 岩波ブックレットNo.178

中野重治『和解の道を行く—わが人生処方—』昭二九・

八・一『文学界』第八巻第八号 のちに『和解の道—』わ

が処世法』を問われて」と改題

佐古純一郎『文学の倫理と信仰』中の最終章『和解の福音

を証しよう』全八巻『佐古純一郎著作集』第二巻『宗教

と文学』昭三五・一一・二〇刊 春秋社

竹内好『和解します』昭四六・六・一『中央公論』第八六

年七号 ちなみに、竹内らの『中央公論』への寄稿拒否

について、後年のその収拾

森川俊雄『和解の幻』平五・七・一『現代詩手帖』第三六

巻第七号 ちなみに、谷川俊太郎の詩集『世間知らズ』

平五・五・五刊 思潮社に寄せた感想

小泉八雲『和解』平井呈一訳 全一三卷『全訳小泉八雲作  
品集』第九卷 昭三九・一二・二〇刊 恒文社 ちなみ  
に、原典は『今昔物語集』巻第二七「人妻、死後会旧夫  
語」第二四

モーパッサン『和解』丸山熊雄訳 短編集『森の中・秘傳』  
昭和二七・九・三〇刊 三笠文庫134

E・F・ベンスン『和解』八十鳥薫訳 短編集『ベンスン  
怪奇小説集』昭五四・九・一〇刊 国書刊行会

さまざまな不和と和解とが物語られている。いま、右の作品  
各個に詳述する必要はない。いずれも、作中、現実の同一平面  
上に「不和の原因」が描かれ、相互不和を載せ、へ和解の原因  
があつて行く手の和解に届く。合理的な推移と因果關係を示し  
ている。「和解」と題して、当然といえは、当然だろう。この  
意味で、志賀「和解」解読のためには役立たない。彼我の相違  
ばかりが目につく。

いまさらながらに、『和解』一編は特異な制作である。やはり、  
作中に求めて父子「不和の原因」はなく、へ和解の原因もない。  
ただ、不和のこととは浄化され、そこから脱却して行く様相  
が、「和解の効果をあげて」描かれている。へ「和解」作品を  
通観して、この感を確実に持つ。

改めて思えば、芥川の目には、志賀の「和解」はどのように  
映ったか。比類のない、強大な制作に初めて接したのだ。文字

通り、「超文学の文学」の出現というよりない。他に表わすこ  
とばを失なう。予想もできぬ、未曾有、おそらく絶後の作品と  
の出会いであつた。破天荒の形式、構造の試み、作家自身は試  
みの意識すらない直接的なそれ、との遭遇であつたらしい。噴  
飯ものと、一笑に付すなどできぬ。「おやぢがよく書けてゐる」  
は、没交渉の父と子とが互いに同調、連携して和解への道を歩  
み来たの意である。和解は是非を問うて、選択、決定したわけ  
ではない。それどころか、いずこへとも知れぬ、唯一の進路で  
ある。父子ともに促されて動き出し、誘導され、直進してそこ  
に行き着く。父子和解であつた。

現実に没交渉中のふたりが、連携交信できる場合は、無意識層  
にしかない。可能だ。父子ふたりの和解、調和的心情の合致は  
偶然の一致ではない。ならば、『和解』は無意識から意識への  
通行、夢から現実への通行を大規模に語つた作品である。芥川  
の自由潤達な、しかも、反芻した慧眼は「和解」の全容を、核  
心をとらえてしまったようだ。そして、この結語でもって敬遠  
する。第二短編集『新進作家叢書8 煙草と悪魔』(大六・一一・  
一〇刊 新潮社)を刊行した直後のことである。

(未完)